

大伴書持の追和歌

——梅花の歌六首の解釈をめぐって——

橋本 達雄

1

これから書こうとしていることは、いわゆる論ではなく、具体的に万葉集の作品をいかに読み解くかという、きわめて基本的なことについてである。したがって注釈的な一面にわたることにもなるうが、今日の進んだ万葉学の水準からしても、解釈の定まらぬものが多いことを思えば、まったく無意味とも思われないので、いささか記して大方の批判を仰ぐこととしたい。

2

『万葉集』卷十七の巻頭近く、作者を大伴書持と伝える六首の歌がある。題詞、左注とともに記すと次のようである。

大宰の時の梅花に追和する新しき歌六首

み冬つぎ春は来れど梅の花君にしあらねば招く人もなし（三九〇）

〇一）

梅の花み山としみにありともやくのみ君は見れど飽かにせむ

（三九〇一）

春雨に萌えし柳か梅の花共に後れぬ常のものかも（三九〇三）

梅の花何時は折らじと厭はねど咲きの盛りは惜しきものなり

（三九〇四）

遊ぶ内の楽しき庭に梅柳折りかざしてば思ひなみかも（三九〇五）

五）

み園生の百木の梅の散る花し天に飛び上がり雪と降りけむ（三九〇六）

九〇六）

右、十二年十二月九日に、大伴宿禰書持作る。

題詞の「大宰の時」とは天平二年（七三〇）正月十三日、大宰府で父大伴旅人が管下の官人三人を招いて自邸で梅花の宴を催した時のことで、宴の歌は歌序とともに巻五に、主人旅人の歌も含めて

三二首（八一五～八四六）収録されていてその時の有様を想像することができる。

書持の兄家持は当時一三歳で父に伴われて大宰府にいたことは巻四・五六七の左注に見えており、後年この時のことをなつかしんで追和の歌（19・四二七四）を作っているので、おそらく宴の雰囲気身近に体感しているのであろう。書持はその時どこにいたか知る資料もなく、年齢も不明だが、仮りに家持より二歳下として一一歳、やはり家持とともに大宰府にあって、幼いながらその日の宴を印象深く傍から観察していたのではないかと思われる。その時から一〇年後、書持二一歳ごろの作である。往時の風流をゆかしみ、偲ぶ心が追和を思い立たせたのであろう。ちなみに父旅人は早く世を去っており、同席した山上憶良も大弑紀卿（男人か）、小弑小野老もすでにこの世の人ではなかった。

さてその六首は、さきに掲げた歌だが、一読して何やら分りにくい点の多い歌でもある。だが、そのすべてに意見が別れているわけではなく、ほとんど問題のない歌もあるが、順序として最初から採り上げてゆきたい。

第一首はその問題のない部類に入る歌である。内容は「冬に続いて春はやってきたけれど、梅の花を、あなたではないので賓客として招く人もありません」というのである。この歌が巻五の梅花の宴の歌の冒頭、紀卿の歌に追和したものであることは、すでに『略解』『古義』以来指摘されている。歌は、

正月立ち春の来らばかくしこそ梅を招きつつ楽しき終へめ（八

一五）

である。「春の来らば」に対し「春は来れど」と応じ、紀卿に対し、あなたのような風流な人ではないので梅の花を客として迎える人もいせんと和し、「楽しき終へめ」（楽しきの限りを尽くそう）に對しては言外に、残念ながら宴の楽しみを尽くすことができまさんの意をこめていると見るべきである。左注によれば十二月九日の作で太陽暦の十二月三十一日に当る。実際に梅が咲いていなかったで、このような歌い方をして風流な紀卿を讃えたのである。

第二首は表現が明確でないところがあるので、さまざまな意見のある歌であるが、はじめに近年の代表的二つの注、『大系』と『全集』の解釈を紹介してみよう。

梅の花は、み山らしく一杯に咲き繁っていますが、それをあなたは、こんな風に眺めても満足なさらないことでしょう。

（大系）

梅の花は 山かと思えばかりにいっぱいに 咲いているのに どうして君（梅）はこうも 見飽きないのだろう。（全集）

『大系』は「み山」との「と」を「として」の意にとり、『全集』は比喩を示す用法とし、「ありともや」の「や」を『大系』は詠嘆の間投助詞としてこの句を順接にとり、『全集』は「とも」を「事実を仮定的に表現する用法」としている違いが見られる。下の句に至っては、『全集』は『万葉考』の「君」を梅の擬人化とする見解をとっているのである。しかし、ここは、この歌が梅花の宴の二首

目の小野大夫に和したものと指摘した『全集』が、その歌、

梅の花今咲けるごと散り過ぎずわが家の園にありこせぬかも

(八一六)

をあげ、「如何に沢山の梅花があつても、かうして君は見えても飽かないだらうといふのである。従来の諸説ここに心付かなかつた為に、解釈に苦しんでゐる。」と述べているのがやや説明不足ではあるが原則的に当たっているとされる。「かくのみ君は」に対する「こうして君は」の解釈があいまいなだけであろう。

わたくしはこの「かく」は大宰府の宴の時の歌の内容を指すものと見て、「かくのみ君は」は「大宰府の時の歌のようにあなたは」と解釈をつけるのがよいと考へる。なぜなら、小野大夫の歌は、旅人邸の梅の花がいつまでも散らずに、今と同じように咲き続けることを願う歌で、美しい花をいつまでも賞美していたいという、欲ばつた耽美的な風流心を歌つたものである。この歌に対して書持の唱和は小野大夫の風流心を讀んで、「いくら山のように梅の花が繁く咲いていても、あなたは大宰府の時の歌でおっしゃっているように、賞美し足りないことでしょう」と、小野大夫の心中を推し量つて和えたのだとされるからである。したがつて「み山と」の「と」は『全集』の比喩的用法とするのが當っており、『とも』も仮定表現とする『全集』が正しいことになる。だが「君」は「梅」でなくやはり小野大夫を指すことになる。追和の歌と考へなくともよいとすれば『全集』のような解釈もあり得ようが、一連六首はこれからも述べるように、梅花の宴の歌にいちいち対応して、このこと

を考慮しなくては解釈が成り立たないので、これだけを例外とする理由はないのである。それにしても表現の不熟さの目立つ歌である。

さて第三首もまた舌足らずな表現によつて諸注の間に統一的解釈の見られない歌である。だが初めの二句は、それほどでもなく、「春雨に促されて萌え出した柳なのでしょか」と解するのが一般的である。ただ、『全集』が「春雨に萌え出た柳が」と解し、「カ」は疑問の係助詞。結びは後レヌ」と注しているのが異なる。これは一般的解釈でよいのだが、問題は以下の三句の解釈をどうつけるかによるのである。まず「共に」は「梅の花とともに」（全註釈・注釈）などと「梅の花という友達に」（大丞）という解釈があり、「常のもの」には「普通のもの」（評釈・大系・注釈）と「四季を通じてのもの」（全集）がある。だが、この歌は『古義』が中山巖水の説として巻五の粟田大夫の歌に和したと述べて以来、諸注の大方が従つているのであるから、当然その歌を考慮に入れて解釈すべきなのである。歌は、

梅の花咲きたる園の青柳は縷にすべくなりにけらずや（八一七）

である。この歌は梅の花が咲いている園の青柳が縷にすることができるほどに美しく芽吹いたことを歌つているので、書持はその柳をとらえ、あなたが「縷にすべくなりにけらずや」と歌つた柳は、「春雨に促されて萌え出した柳なのでしょか、（それとも）梅の花の咲くのと一しよに梅の花とともに遅れずに萌え出した普

通の柳なのでしょうか」と、問いかけるように唱和しているのだと解される。一首、三句目以下の句の続き方や「常のもの」などあいまい不十分な表現もあるが、こう解釈すれば、書持の意図を十分汲みとることができよう。

○ 第四首は意味は明快で、大方の注が正しい解釈をつけている。その代表として『注釈』の口訳を示すと、

梅の花をいつは折るまいといふ風に折る時期のえりごのみをす
るわけではないが、咲き盛つてゐる時には折る事は惜しいもの
である。

のようである。しかし、なぜこのように歌っているのかについて書持の心中を考えないと、『全集』の次のような解釈も出てくるのである。その解釈は

梅の花は、いついつは折るまいと 折らないのを厭はせぬが
満開のころだけは 折らないと惜しいものである。

となつて、まったく通説と逆になる。『全集』は「何時は折らじと厭はねど」に對し頭注で「これこれの時は惜しいから折るまい、などと折り取らないのを嫌がるわけではないがの意。蕾や五分咲きの間は折らずにおいてもべつにかまわない、という意味だろうが、まわりくどい言い方である。」と述べているが、やや考え過ぎで、作者の述べようとしておることをとらえそねておると思われ。

この歌も梅花の宴の六首目、葛井大夫の歌に和したものであること『全集』に指摘があり諸注の従つておるものである。ただ『私

注』だけは以前の歌も特定の一首に追和したと見るべきでないとする立場を通しており、こゝも「此も、梅花宴の歌中に数首見える梅を折る歌に追和したので、一首二首と限るべきではない」と述べている。だが、葛井大夫の歌は、

○ 梅の花今盛りなり思ふどちかざしにしてな今盛りなり(八二〇)とあつて、二句と五句で繰り返して花の盛りを強調しているものである。たしかに梅の花を折りかざす歌は『私注』のいうようにほかにもあるが、盛りをとくに取り上げて歌っているものはなく、書持の歌がこれを承けていることは間違いないとしてよい。そこでその追和のしかただが、葛井大夫の歌は息太く力強く会衆に呼びかける形の歌で、きわめて明快に、「今は盛りだから、みんな折ってかざしにしようよ」といっているのである。これに對し書持は、「わたくしもあなたのおっしゃることに反対するつもりはありませんが、そうはいつても、やはり満開の時に折るのは、もったいなく惜しいものですよ」と答えた形で歌つておると見るべき歌であらうと思われる。

○ 第五首も問題の多い歌である。まず第一、二句の解釈をめぐるで、「内」を現在の意にとり、「今遊んでいるこの楽しい庭で」(大系)ととる『全註釈』『注釈』などの説と、「遊びのうちの最も楽しい園遊で」と解する『全集』の説とがある。どちらにしても熟さぬ語法で判断はむつかしいが、こゝは小島憲之氏が「夜裏」「春裏」などの語性を考察しつつ、これも漢語「某裏」と「これを訓読

化した歌語とよって誕生した新造語ではなかつたか。」と述べて

おられるのに従うべきかと思う。従つて今は「遊びのうちの」としておきたい。だが、ここよりも問題なのは結句「思ひなみかも」の解釈である。この語法は『全集』が「ミ語法十カ十(モ)は一般に疑問条件をなす」としているのがよく、素直に「思ひがないからでしようか」と解釈すべきものと考えられるが、語法を一般的に説明しつつも、『全集』はこの歌について、

ここは思ヒナキカモと同じか。以上の三首にはそれぞれ無理な表現がある。

と頭注でいい、「心残りもないことだらうか」と口訳している。他の諸注もこれとはほ同じで大差はない。その一部をあげると、

何ノ物思ヒモナイダロウカ(全釈)

思ひがないことだらうなあ(全註釈)

思ひのないことであらうなあ(窪田評釈)

物思もないことであらうか(佐佐木評釈)

物思ひがないであらうか(大系)

何の物思ひも無い事であらうかナァ(注釈)

のごとくであり、それぞれ一般の語法と異なる理由を述べており、『大系』は「表現不足の句」と注記している。この解釈の源は、おそらく『代匠記(初)』の「おもふことのなきなり」、『代匠記(精)』の「思フ事ナカラムカモノ意ナリ」とか『拾穂抄』の「思ひなみは思ひなき也」などに発するもののように、前からの続きでここを「思ひがないから」と訳したのでは素直に解釈がつけにくいところ

にもとずくものであつた。そこで「表現不足の句」とか「語法的に無理な表現」などといわれるのであるが、そうきめつける前に、この表現で意味を通ず方法がないのかについて考えて見るべきなのはなかるうか。たしかに表現の稚拙な面は以前の歌にもあり、この歌でも「遊ぶ内の」のごとき不熟な表現も見られるのであるが、理解したい表現のすべてを作者の責に帰すべきではあるまい。

そこで一案を次に述べる。この歌は『全集』が指摘して以来、大方の注釈が、巻五梅花の宴の笠沙弥の歌に和したものとしているものである。その歌を考慮に入れば一般の語法で解釈ができると思ふからである。歌は、

青柳梅との花を折りかざし飲みての後は散りぬともよし(八二一)

である。この歌には類似の発想の歌が坂上郎女にあり(8・一六五六)、「散りぬともよし」と歌うのも例のあるものだが、それはともかく、内容は、酒宴の歓楽を尽くしてしまつたのちには、もはや散つてしまつてもかまわないという、強い、しかも思い切つた表現をしたものである。こう言い切つてはばからぬ笠沙弥の心中を書持は推し量り、どうしてこのように歌つたかの理由をそんたくしながら和えたのがこの歌であらう。すなわち、あなたが「飲みての後は散りぬともよし」などとおっしゃるのは、「遊びのうちのもつとも楽しい園遊で、梅や柳を折りかざして飲んでしまつたら、もう何の物思ひも残らないからでしようか」と応じたものと解するのである。こう考えると語法的に無理な解釈をつけることもなく、このま

まで通る歌となるのではなからうか。

以前の歌の場合でもそうであったが、書持の六首は巻五の梅花の宴の歌とそれぞれ対応しつつ和えているという指摘があり、あるいはそれを承認していながらも、諸注の解釈のしかたは、対応する歌をそれほど深く意中に置かず意味を取ろうとしている場合が多いように思われる。この書持の一連の追和は、すべて大宰の時の梅花の宴の歌を作った人々の作意とか心境を思いやりつつ、それに対する自分の感想とか疑問、あるいは意見を問いかけるように歌っているのだと見るべきであらう。したがってこの書持の追和の方法を理解して訳さないと、たとえ字面上の解釈が当たっていたとしても、真の解釈とはいえないのではないかと思われるのである。

第六首はそれほど問題のない歌で、これが梅花の宴の大伴旅人（主人）の歌に追和したものとする指摘は『考』にはじまり、近代の諸注すべてが賛同している。そのとおりと思われる。ただ、下二句「天に飛び上がり 雪と降りけむ」の表現の意図を正確に抑えなないと、追和の方法も理解しにくいことになる。この二句は花びらが「天に飛び上がって、雪となつて降つたのでしょう」の意で、散つた花が空に舞い上がって、という表現・着想は、

突如として「飛びあがり」といふ硬い句をつらねたのは、奇抜である（総釈—佐佐木信綱）。

幼稚極まるどころに、一種のおもしろみがある（窪田評釈）。

率直で、奇妙な事である印象を与えている（全註釈）。

突拍子もない表現で甚だ拙い（私注）。

などと評されていた句であつて特殊であるが、小島憲之氏が、その奇抜さを認めながら、

恐らくこれも梁簡文帝の梅花賦の、

或承_レ陽而發_レ金、乍_レ雜_レ雪而被_レ銀、標_レ半_レ落_レ而飛_レ空、香_レ隨_レ風而_レ遠_レ度（雲文類聚、梅引用）

と云つたやうな表現によつたものではなからうか。

と述べているごとく、^(注2)中国詩的表現を意図して、構えてとつた特殊な言い方であつたことを知らねばなるまい。なぜならば追和の対象である旅人の歌がやはりそうした表現をとっていたからである。旅人の歌は、

我が園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも（八二

二）

であつて、梅の花が雪のように散るさまを、「天から雪が降ってくるのだらうか」と見立てたもので、『全集』が「梅の花を雪と見る趣向は、六朝以来詩に例が多い」と注意しており、さらに「雪の流れ来るかも」について、同じく小島憲之氏は、

詩の「流風」「流霞」「流雪」などの「流何」の応用であり

（その一例、文選洛神賦「飄飄兮若_{コト}流風之廻_ル雪」宋鮑照、代堂上歌行「朝光散_ル流霞」、梁裴子野、上朝值_ル雪詩「流雲飄_ル繡桂_ニ」、隋王衡、翫雪詩にも「皎潔隨_ル処滴、流乱逐_ル風廻_ル」とみえる。

^(注3)と指摘し、中国詩の応用的表現であることを明らかにされている。

である。

そこで追和のしかたであるが、旅人が「天より雪の流れ来るかも」と歌ったところをとらえ、「あなたは天から雪が降ってくるのだらうかとおっしゃっていますが、じつはその逆で、散った梅の花びらが天に舞い上がって雪のように降ってきたでしょう」と応じたのである。この両者の応答はこれまでの歌でもっともわかりやすく、諸注もこうした見方で捉えているものが多い。従って漢詩的表現の対応を考慮に入れること以外、多く加える要はなかる。

3

六首の解釈は大体以上のごとくである。本稿の主旨は述べてきたように解釈の方法にあるのでこれで稿を閉してもよいのであるが、少し気になることがあるので、最後にその点について触れて置きたい。それはこの六首が梅花の宴の冒頭から八首のうち、はじめの三首と、二首飛ばして六・七・八首目の三首に追和している点である。なぜ四首目の憶良の歌と五首目の豊後守大伴大夫の歌に追和しなかったのであろうか。このことについてはほとんどの注釈書が触れていない中で、『全釈』のみが次のように言っている。

以上の六首は右に述べるやうに、巻五の梅花歌三十二首中の六首に和したもので、三十二首中の八首は、かの宴席に列した上客七人と、旅人との歌であるから、それらの歌どもの中、大式紀卿・少弐小野大夫・少弐粟田大夫・筑後守葛井大夫・笠沙弥と父旅人との六首に和したので、しかもそれが巻五の記載の順

序になつてゐることは注意すべきである。第四首の筑前守山上大夫と第五首の豊後守大伴大夫との歌に對しては、和してゐないのは、別に理由があることではあるまい。従來の諸註これらに心付かなかつたのは遺憾である。

結局こゝう以外しかたがないところもあり、書手に直接聞いてみるしか分らないことでもあろうが、やはりその理由は憶良と大伴大夫の歌の性格によるのではないかと思われる。その二首は、

春さればまづ咲くやどの梅の花ひとり見つつや春日暮らさむ
(八一八)

世の中は恋繁しゑやかくしあらば梅の花にもならましものを
(八一九)

である。前者は「ひとり見つつや」の「や」をめぐって反語とする説と詠嘆とする説とがあつて解釈に問題を残しているのであるが、詠嘆としても「宴席の中にあつて自己の孤の世界を詠んだ歌か」(全集)と見るなど種々に解しうる歌である。しかし、この歌は、伊藤博士が述べているように、

春になるとまづ先に咲く庭前の梅の花、この気高い花はぜひに
思う人に見せたい花だが、それもかなわず、ただ一人見つつ春
の長日を送り暮すことであらうか。

というのが正しく、恋歌の発想をとつて園の梅を讀えつつ、併せて
先年この邸で妻を失つた旅人の心境に立つて歌っているのだと解す
べきなのであろう。そしてその「ひとり見つつや」の心境を正しく
受けとめたので、次の大伴大夫は「世の中というものは恋の思いが

繁く絶えないものだ」と同じく恋歌の形で承けたのだというのである。^④この二首はそのように一組として読まれるべき歌で、しみじみとした雰囲気の歌であって、直前の八一七や直後の八二〇のように明るい、宴会を謳歌するような歌とは柄がちがっているのである。書持がこの二首の真意を知っていたかどうかは不明であるが、異質な性格の歌であることには気付いていたのであり、単純に追和できないむつかしさがこの二首にはあったのだと考える。それゆえに避けて通ったもので、『全釈』のいうように、「別に理由のあることではあるまい」などといって過ごすべきではなからうと思われる。『全釈』の発言にふれてもう一つ述べておきたいことは、梅花の宴の歌との対応についてである。『全釈』は六首すべてにわたって従来関連の指摘がなかったように述べているが、すでに触れてきたように、第一首（三九〇一）は『略解』『古義』が八一五を指摘し、第三首（三九〇三）と八一七については『古義』が、そして最後の第六首（三九〇六）と八二二については『考』が触れているのである。全体にわたるつながりを説いた『全釈』の功績の大きさはいうまでもないが、幾分割引く必要はあろう。また、その指摘をしつつも、追和の方法についてはまだ立入り方の浅いところもあつたことは、それぞれの歌のところで述べたごとくである。解釈とは、しよせん、このような道をたどりながら深められてゆくのであるう。

注1 小島憲之氏「万葉題詞のことは」『上代文学』第四十四号、昭和55・4月)

2・3 同氏『上代日本文学与中国文学』中
4 伊藤博氏「園梅の賦」『万葉集の歌人と作品下』所収)

(追記) 本稿で問題とした三九〇五番歌について、日本古典全書『新訂万葉集四』頭注が、「思ひ無みかも」に対して「心残りが無いからであらうか』『散りぬともよし』の心持を推量してゐる」と述べているのをあとで知った。語法に忠実に解釈した唯一の例として貴重であり、すでに私見と合致する解釈をしていた人のあつたことを心強く思うとともに、その点を明記しておきたい。

なお、本稿は、昭和五八年七月九日、名古屋市中京大学における美夫君志会全国大会、公開講演会において公表したものである。